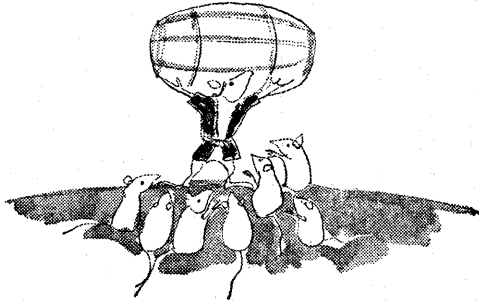


近代短歌に現われた子ども（二十二）



大塚 雅彦

(42) 出征将兵等の歌（つづき）

③ 『大東亜戦争歌集』（将兵篇）

『大東亜戦争歌集』と名づけたものにも二種がある。一つは「日本文学報国会」の事業の一環として同会短歌部の編さんしたもので、昭和十八年九月に協栄出版社から刊行されている。昭和十四年から十七年十一月までの戦没将兵・現地の将兵・傷病将兵・看護婦・軍属等の二〇六〇名の作三三九八首を収めている。『和歌文学大辞典』の木俣修の説明によると、「数多くの検閲をくぐった歌であるから、最も誠実に人間の精神をもって歌ったものなどは滅びてしまったであろうが、戦争の現実の惨を伝え、微かな戦争への抵抗を試みたようなものがないでもない」

という。もう一つは柳田新太郎編に成り、『愛国篇』『将兵篇』の二冊として共に昭和十八年二月に天理時報社から刊行されたものである。前者は昭和十六年の開戦の日から十七年七月に至る期間の雑誌新聞に発表された作品を博搜して八二一名の作者の二五八八首を収めたものだが、「空虚な観念的な戦争讃歌と、緒戦における戦捷祝歌とがその内容をなしているもので、短歌がようやく人間の精神を喪失して、ひとりの〈愛国調〉に塗られていこうとする姿を如実に示している」と木俣修が述べている通りであり、こんにち読むに堪えないものが多い。これに対し『将兵篇』の方は、『愛国篇』と同じ期間、同じ方法によって五二四名の作品二五六二首を収めているが、文字通り各方面に派遣された将兵や軍属、報道班員、戦争に直面した現地邦人等を作者としているだけに、戦争の悲惨さを歌い、人間性を強く刻印しているものが少なくない。いま『将兵篇』の方から、子どもが出てくる歌を若干抄出してみよう。

① 仏壇に剪りし頭髮蔵ひをれば何ぞと吾子の怪しみて

訊く (善陸病 玉尾延忠)

② 父われとひとつ臥処に寝ることをよるこびそめし頃を召されぬ (牡丹江 利根 洋)

③ 死ぬる身と思へば泣く日あらせずと妻に子どもを生ましめにけり (横須賀 中村精希)

④ ふたたびのめぐる忌日に愛し子の戒名を知らず今日もわれ征く (北支 生田景応)

⑤ ため置きし妻の音信が三年半の吾子が成育日記となりぬ (中支 城戸義人)

⑥ 一番の鶏は師走の二十日より卵を産むよと吾子は言ひ来ぬ (中支 藤沢秀圃)

⑦ 小さき手をわが陰膳にあはすとぞ読みかけし涙たりをり (中支・北滿 松岡茂夫)

⑧ 蛙鳴く道にしおもふふるさとの夕べをいかに子があることぞ (滿州 寺内貞一)

⑨ かしこまり写れる吾子よ戦ひの父想へるやその小さき胸に (中野正巳)

⑩ 右左寄り来る子らはよろしめて頭たたかす子の父我

は (掃還 松本千代二)

① 昨日陥ちし敵ト一チカに銃を握り重なり死せる少年
兵あはれ (広瀬俊勝)

② 童は母失せければこの国の古りし習と白き杏はく
はく (北支 有川美亀男)

③ 知人の娘に似たる少姑にその名をつけて呼び慣らし
居り (中支 大西寿一)

④ 日本の兵隊さん今日はと鮮かに安南小童我に言ひ来
し (仏印 森岡三郎)

①②は出征の折の「父と子」である。①はフォーマルす
ら漂っているが、内容は深刻なのだ。そのちぐはぐな感
じが却って読者の心にほろにがい味わいを与える。②
も、しみじみとした情感が、実感として伝わってくる。

③はユニークな作品だ。出征兵の中には、妻を未亡人に
したくないからと婚約者や恋人との結婚をむしろ諦めて
前線に出て行った者もあったことが、手記を読むとわか
るが、③の作者はむしろ「自分は死ぬ身だから、あとに
残る妻を泣かせないよう子どもをませた」という逆

のような発想なのか？ こういう考え方も当時あったの
であろうか。④の作者は出征中に愛児を喪ったのであ
る。⑤⑥⑦は妻や子の便りであるが、⑥が子どもの手紙
の文句をそのまま取り入れたような面白味がある。⑧⑨
は戦地で愛児を偲んでいる。⑩は掃還した父をめぐる子
ども達の姿が出てをり、作者は白秋門下の歌人。⑪は所
属軍の名称や駐屯地の記入がないが、中国戦線である
う。渡辺直己作品に似ているが、結句を「あはれ」とい
う一般的、類型的感懐で結んでしまったのは、悲劇的な
内容のリアリティを薄めていて惜しい。⑫⑬は中国の子
ども達、⑭は珍らしく安南の幼童が登場している。⑫の
作者は歌誌「真人」の同人で国文学者である。

㊦ 『昭和万葉集』 卷六

詞華集として『昭和万葉集』を逸するわけにはいか
ない。これは講談社が創業七十年記念に、全二十巻、別
巻一を昭和五十四年から刊行したもので、野心的な試み
であった。第一回配本は巻六(昭54・2刊)であり、この
巻は「太平洋戦争の記録」と銘うって、戦中歌として、

つまり昭和十六年の開戦の日から二十年の敗戦直後までの戦地詠・銃後詠等を収めている。個人別でなく、主題別になっているから、戦争時の種々相が展望できる。ただその集録、編集方針には批判がないわけではなく、これをもって太平洋戦争時代の短歌を全く網羅しているなどとは言えない。例えば歌壇綜合誌「短歌現代」昭和54年8月号には「昭和万葉集巻六を考える」という特集があるが、それに載っている諸家の批評を見ても、応募しなかった人の作品が入っていないし、当然入るべき者の歌が落ちているとか、戦時中は戦争讚美・謳歌のうたや戦意昂揚の歌などもむしろ多かったのに、それらを省略しているのは客観的に見て公正といえるだろうかとか、沖繩戦の歌や原爆関係の歌が全くないのは何故だろうか、そもそも作品の文学的な質・レベルを揃えた詞華集的なものにしようとしたのか、それともクロニクル的な意味を重視する方向に重点があるのかはつきりせず、中途半端的であるとか、かなり厳しい批判が提出されている。それに、もとより短歌は文学作品でありルポルタージュ

や記録そのものとは違うのであるから、近松のいわゆる「虚実皮膜の間」に成るものであり、事実そのものと考えたら、むしろ判断を誤るかもしれないのである。併し乍ら、短歌は他の文芸に較べるとかなり事実在即してうたう面が強く、従って戦場や戦争下の生活の実態を臨場感をもってうたっているのので、作品から当時の国民の生活感情や庶民の意識をうかがうことが出来るのである。

① 真綿帽子かむりてねむり深き子に発ち征くわれの手をふれてみつ
(二村伝次)

② 隊列に何処までついて行くならむ幼な児背負ひ小走る妻は
(武生文夫)

③ 幼らの勢ひ旗ふる道ゆけり面はゆくして送らるるわれや
(吉野昌夫)

④ 初年兵われら子を持つ父にして寄ればおのづと子等を噂す
(桜井慶雄)

⑤ わが子とかく語らふはかつてなし兵舎の長き卓に残りて
(杉浦民二)

⑥ 空を暗み移らふ蝗のむれ見れば子への便りにまづ書

きにけり

(村井憲太郎)

⑦黄に濁る空はるかなれ椰子陰に生徒の便り読みかへしをり

(安良岡康作)

⑧薯粥の熱き食しつつかアラランブル衝きし少年戦車兵を思ふ

(巽 与志雄)

⑨わが前に煙草をねだる浮浪児の澄みてかなしき日本語言ふ

(川口常孝)

⑩代用食食ひがてぬ子を諭せどもわれもまづしと思ひつつ食す

(鑛 京造)

⑪たまさかに配給の肉は子らに分け妻と煮こみの野菜のみ食ふ

(佐沢波弦)

⑫魚油くさき石鹼泡立て湯浴みする幼き姉と妹のこゑ

(嶋 正子)

⑬門前に母待つ子等のざわめきぬ終業近き軍需工場は

(水谷 利)

⑭食乏しく勤勞奉仕に疲れ果てて帰り来し娘は病みて死にゆく

(金子不泣)

⑮秩序なき工場にゐて子は日毎工員などと争ふらしき

(福田栄二)

⑯徹夜作業の続く日ごろに疲れたる生徒は空襲に避難すらすえず

(井川美弥子)

⑰たちまちに稲刈り終へし女学生等互に身装整へはじむ

(藤原多計志)

⑱銃持ちて丘に来れる女学生の一群ありて射撃始めぬ

(杉本栄一)

⑲命捨てて国に報ゆる者誰ぞと言ひ終へざるに皆立てり児等は

(佐久原直樹)

⑳聴きわけて疎開ときめし末の子の寢姿今宵幼なかりけり

(稲垣以登)

㉑盛り分けし椀いつ杯の羊がゆを疎開の子らは拌みて食む

(浜中ふじの)

㉒五年生山田茂と言ひし児は母の写真に声かけて寝ぬ

(野沢学人)

㉓待避壕ひそかにうたふ子守唄頭巾まぶかく子はねむりゆく

(富山繁子)

㉔土いちり余念なき子の胸の上にくすよこれたる身許

認識票

(大岩徳二)

⑤ 機銃掃射の炸裂音に小さき掌は吾が乳房握り顔を埋むる

(大久保礼子)

⑥ 土壕に敵機を避けてる向へば我が膝の子は父へと移る

(亀井斐子)

⑦ 空襲の火の海逃れ夜の明けを路上に深く児と眠りたり

(杉浦よし子)

⑧ 人群の中に吾れと子と呼び合ひて声あれば又走り出だせり

(北浦 宏)

⑨ 子を背負ひ火中来る人用水に駈け寄り水を背の子にあびす

(都筑省吾)

⑩ 逃げおくれ炎の中に臥せる父子子の狂ひ出で父を罵る

(同)

⑪ をさなどち猛火の中を獅子舞のごとく布団をかぶり泣きゆく

(浜田幸子)

⑫ 幼子は手に位牌もち火の子ふらす烈風の中に父われを見ぬ

(矢代東村)

⑬ ⑭ ⑮ は出征の歌である。①は生まれたばかりで真綿

の帽子をかむり、ねむっている嬰兒に別れての出征、②は壮行の行進隊列の中に居る夫を追って、幼児を負うたまままちよこちよこ必死に走る妻——緊迫した場面である。③は学徒出陣の歌だ。学徒出陣というのは、従来大学・高専在學生は徴兵延期を認められていたのを、昭和十八年十二月一日に延期廃止をして入隊させることとなったもので、この年の入隊を「学徒出陣」と称した(私のように昭和十六年大学入學者は「半年繰上卒業」で辛うじて卒業出来たが、翌十七年入学組以降の者はこれに該当した)。その年十月廿一日明治神宮外苑競技場での雨中の分列行進が、この出陣学徒壮行大会である。安田武の推定では、この折の出陣学徒総数は全国で十二、三万人くらいという(安田『学徒出陣』昭42・10)。これを扱ったものに安田の本の他に、東大十八史会編『学徒出陣の記録』(昭43・8)、野原一夫『回想学徒出陣』(昭56・10)等がある。③の作者(現「形成」編集責任者)は当時、東大農学部在學のまま学徒出陣したもので、この歌は、子ども達が元気よく旗を振って送ってくれるの

に、学徒らしい羞恥心からでているのであろう。④⑤は軍隊生活の歌だ。④は初年兵（入ったばかりの兵で、最下級の二等兵である）でありながら年輩者であるから子持ちの兵隊ばかりであることがわかる。私が二度目に在隊した朝鮮・平壤第五十一部隊なども老兵の召集兵が多く、故国の子どもの達のことを思い出してはメソメソしていたのを、独身者の私は同情していたのを思い出す。⑤は面会室での子どもとの語りだろう。⑥は中国戦線で、中国の蝗の大群のことはパール・バックの名作『大地』に出てくる場面がある。⑦は教師の歌で、この作者は国文学者である。⑧はマレー戦線で、「少年戦車兵」とは少年航空兵・通信兵などと同じく、昭和十四年から十六才以上の志願者を兵に採用したのだ。無惨なことであった。⑨は中国戦線で、この浮浪児は中国の児だ。この作者も国文学者である。⑩⑪⑫は食料や物資の悪化で、その逼迫が子ども達にまで及んだことがわかる。⑬から⑰まではいわゆる勤労奉仕・勤労働員を扱っている。⑱では母親もまた工場で働き、他の歌では動員された子ども達のみじめさが描出されているが、⑰は女兒の本能のようなものを描き、微笑ましい。⑱は女生徒も軍事教練をさせられたことを示す。⑲は軍国下の教師と教室の教員の子たちの姿だ。⑳から㉒までは学童疎開させられた子ども達の生懸である。㉓から㉕までは待避壕生活や空襲下の防空壕の中での緊迫した状態をうたう。㉖の「頭巾」というのは防空頭巾である。㉗の「身許認識票」というのは、戦争中に身もと不明にならないように住所・氏名・年令・血液型などを書いて胸に貼らされた布である。㉘の作者は評論家亀井勝一郎の夫人である。㉙から㉛までは東京大空襲等の歌である。㉜㉝の作者も国文学者、㉞の作者は革新系の弁護士で、「人民短歌」系の歌人であり、㉟の作者福田がジャーナリストで歌誌「古今」を主宰した人であるのと共に、著名歌人であった。私はこの巻六では、ここに例示したような空襲をうたった歌が、阿鼻叫喚のぎりぎりの世界を鋭くとらえて最も充実した作品群だと思う。

④その他

米田利昭宇都宮大教授は、戦争と近代短歌との関係を最も深く追究している国文学者であるが、その近著『兵士の歌』（昭58・8）は歌誌「アララギ」の戦場詠投稿者から将兵六人を選んで、彼等の歌を解明し、生涯を素描している。その中に子どもを詠じた作品もある。

群衆に驚けるらし声たてず妻に抱かれて手をあぐる子
は
（武田嘉雄）

召され来し北支那の町に小孩子らと爆竹あげて年祝ぐ
吾は
（村石波之助）

引き揚ぐる高砂丸の子供等よ日の丸打ち振り打ち振り
万歳の声
（佐藤完一）

夜の汽車にいたく汗垂り嬰兒を抱く母見れば故郷思は
ゆ
（小島弥太郎）

このうち、小島は海軍予備学生の航空少尉として、昭和十九年六月テニアンの空中戦で戦死している。

大谷晃一帝塚山学院大教授の近著『歌こそわが墓標』（昭59・7）は、副題に「昭和無名歌人伝」とある如く、「民衆の中の、名もない歌詠み」の人々にインタビュー

などの取材をして彼等の半生を描いているが、

玉碎の命下りし夜の北の空四人の吾子の姿映りぬ

（平出孝行）

の佳作や、敗戦前後の満州における子ども連れの引揚逃避行の苦難をうたった中西さんの一連等がある。

暮れ方は乳欲りおびえ泣く子らの世界となりて灯りなき汽車
（中西恭子）

追はれつつわれ等が部屋に逃げこみ来し母もその子も
既に髪なし

母われの肌の温みも甲斐なきか冷えゆく吾子をただ抱き
きに抱く

吾子を焼きし小山の見ゆる道恋ひて帰国ま近きけふ町
に出る

まことに世には短歌のような渺たる文芸に人生を托して生きるつましい人々も居る。本書中の一人林満子さんが述べているように「わたくしの歌が一首でもそこに残れば、生きて来たしるしになる、わが墓標になる」ということであろうか。
（お茶の水女子大学）